



連載

ビブリア・トーク
—私のオススメ—

… 全岡 晃 (東邦大学)

機動警察パトレイバー 風速 40 メートル

機動警察パトレイバー
風速40メートル
伊藤和典

伊藤和典 著

(株) KADOKAWA 富士見書房 (1990), 229p., 300 円 + 税, ISBN : 978-4829123744

伊藤和典による本書は、アニメのビデオや映画、コミックで展開されていた「機動警察パトレイバー」シリーズの1つである。汎人間型作業機械「レイバー」がさまざまな分野に進出した時代において、警察に配備されたレイバー隊の活躍を描く物語であるパトレイバーは当時から大きな人気を得ていた。

本書は2つの物語が収録されており、その1つであり本書のタイトルともなっている「風速 40 メートル」は、1989年に公開された映画「機動警察パトレイバー the Movie」のノベライズ版であり、本書の大部分を占めている。本書は25年前に製作された作品とは思えない現代に通じるさまざまな要素を持った作品となっている。この点こそが、情報処理学会の会誌でこの物語をおすすめする理由である。

物語の芯に位置するのは「OS」

レイバーに搭載されているOSの新たなものが開発され、それが大規模に適用された。しかし画期的とされる新OSには、悪意のあるプログラムによりレイバーが暴走する仕組みがあらかじめ組み込まれており、首都圏は壊滅の危機を迎える。

これが物語のあらすじである。

物語の芯には「OS」があり、画期的なOSが開発されたことにより世の中が進んでいく、というところから物語が始まっていく。繰り返すが、この話は1989年に映画化されたものであり、Windows 95が発売される6年前のことである。一般人にはOS

という言葉さえまったく聞きなれないものであった時代である。そのような時代に、物語の芯にOSを据えた本書の先進性はすごい。面白い。

色褪せず現代に通じる示唆

OSを中心として物語が進む本書であるが、そのほかにもさまざまな点で現代に通じる示唆が含まれていて面白い。すべてを紹介することはできないが、いくつか紹介しよう。

まず件のOS「HOS (Hyper Operating System)」ははじめから悪意のあるプログラムが含まれていた。これを文中では「正真正銘のウイルスが仕掛けてあった」と表現しているが、これは現代のコンピュータウイルスの定義とは離れている。より大きな意味でマルウェアと言えるだろう。「トロイの木馬」という表現もされているが、こちらは現代の意味としても正しい。25年前にはまったく一般的ではなかったこの用語が含まれていることもこの物語の凄さを示すものである。なにより、このHOSは本来の目的であるレイバーの暴走を偽装あるいは隠蔽し、OSとしての動作を（しかも従来OSより高性能に）行うソフトウェアとなっている。まさに現代、Androidのアプリケーションでプライバシーやセキュリティの観点から大きな問題となっている点と通じている。面白い。

主人公らが操るレイバーにもHOSのインストールが指示されていたものの、整備班員の機転により「書き換えるフリして、起動画面のダミー放り込

んで」書き換えを故意に行わず危機を回避していた。こちらもまた興味深い。複雑化するソフトウェアの処理内容に対し、ユーザがソフトウェアと接するのはインタフェースであるUI (User Interface) のみ。UIで触れられる部分だけでいかにユーザに信頼を提供するかは、現代そして今後ますます重要になる大きな課題である。別の視点で考えると、UIを似せるだけでユーザは偽物を信頼してしまうのではないかと。Webや電子メールにおけるフィッシングと同じ構図である。25年前の本書において、整備班員はフィッシングをしていた。数行のシーンであったが、深い示唆を与えてくれる。面白い。

犯人であるHOS開発者は、これまでの経歴にかかわるすべての組織のシステムに侵入し、自身にかかわるデータを消去していた。物語当初で開発者が他界していることも加わり、捜査員（と読者）は開発者の人間性を感じることなく物語が進んでいく。データを消すことで人間としてのアイデンティティが見えなくなり、喪失されている状態を見せている。情報通信の時代において、アイデンティティとは何なのか。アイデンティティを形成するのは何なのか。ソーシャルネットワーキングサービスが隆盛してい

る現代において、この点が投げかけるものもまた面白い。

25年前の作品であるため、古さを感じる部分があることは否めない。しかし、読み進めるごとにいろいろな示唆を与えてくれる。それらは色褪せず、むしろこの現代で身近な問題になってきた。私はセキュリティの分野で研究をしているため、受けた示唆が上記のようなものであったが、人それぞれ受け取るものがあるのではないかと。なにより、物語として面白いのでぜひ一読していただきたい。

本書への謝辞

本書をはじめとするシリーズに、私は情報を学ぶ道を開いてもらったといっても過言ではない。この借りはいずれ精神的にお返ししたい。

(2014年6月4日受付)

金岡 晃 (正会員) akira.kanaoka@is.sci.toho-u.ac.jp

2004年筑波大学大学院修了。セコム(株)、筑波大学を経て2013年より東邦大学。暗号技術の応用、ネットワークセキュリティ、ユーザビリティに興味を持つ。博士(工学)。

